



中学生における障害者意識の分析： 交流群と非交流群のテレビ視聴感想文分析を通して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2012-11-07 キーワード: 作成者: 上谷, 宣正 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00004004

中学生における障害者意識の分析

—交流群と非交流群のテレビ視聴感想文分析を通して—

上 谷 宣 正

I. 問題と目的

障害者運動において1979年までは、全ての障害者の教育権を獲得することが最も重要な課題であった。というのは、養護学校が義務化されていなかったため、養護学校対象者の一部は就学猶予・免除規定を強要され、教育権が剥奪されていたからである。それが1979年の養護学校義務化によって、曲がりなりにも一応全ての子供の教育権は保障されるようになり、障害者全員の義務教育を保障するという課題は達成された。そのことは就学猶予・免除者が1973年には17,803名もいたのが、養護学校が義務化された1979年には3,384名に、さらに1984年以降は1,200人台で推移していることから明らかである。

義務教育が成立する以前はもちろん多くの差別は存在していたにしても、障害者と健常者は同じ社会で生活していた。それが教育制度が進展するに連れて、教育の効率化あるいは障害者に対するいわれなき差別思想のため、障害者と健常者の教育は分けて行なわれることが当たり前になってしまった。教育機関を分離したため、障害者は日常生活の中でも健常者と分離され、今では健常者は障害者とマスコミを通じてしか接触できなくなってしまった。あまりにも長期間健常者と障害者はセグレートされ続けた結果、お互いが偏見なしに日常生活を共にすることは不可能になってしまった。このように障害者と健常者を分離して教育することは学校教育の弊害の一つと言わざるを得ない。このように障害者と健常者を異なった環境で教育することを容認する理論は「二つの箱理論」と呼ばれており、障害者は障害がある以上健常者から分離し、障害者と健常者はそれぞれ目的に合わせ異なった環境で教育をするのは当然であると考えられていた。つまり分離はすれども平等という理論である。アメリカにおいては、この理論は1954年有名なブラウン判決で完全に公教育上は否定された。1971年にはミルズ判決において特殊教育上でも否定された。日本も当然統合教育を指向せざるを得なくなった。

1981年が国際障害者年に定められ、「完全参加と平等」というテーマのもと「一部の人々をしめだす社会は、弱くてもろい社会である」という基本理念に基づいた「障害のない他の市民と同等の生活の享受と社会の発展に参加する権利の保障」が求められるようになった。つまりノーマリゼーションが指向されるようになったのである。さらに1983年からの10年は「国連障害者の10年」と定められ、この10年の間にできるだけノーマリゼーションが進展するよう政府に働きかけがおこなわれてきたのである。1992年は最後の10年目にあたり、10年間の成果が試される年である。この10年間に行なわれた主な施策には次のようなものがある。12月9日を「障害者の日」と定め、マスコミなどを利用して障害者理解を促した。身体障害者雇用促進法を障害者の雇用の促進等に関する法律と改訂し、より多くの障害者が社会で働けるようにした。グループホームが制度化され、脱施設化が指向された。学校教育においては養護学校幼稚部の教育課程の規準が初めて示され、障害児教育における早期教育の重要性が認識された。通級学級の制度化の見通しがつき、学校教育において

も統合・交流教育が推進された。

ノーマリゼーションを推進するためには、障害者と健常者ができるだけ交流を持ち接触することが必要である。上谷（1992）の調査結果によると、現在の中学生は、ほとんどの者が障害者に対する情報は得ているが、情報源は主としてテレビというマスメディアと家庭である。しかも情報は肢体不自由者に限られている。交流の効果は担当する教師に大きく依存し、交流群で教師から得る障害者についての情報は、交流に熱心な教師からは80%以上、あまり熱心でない教師からは41%強でしかない。交流の効果が現われるのは障害者との実際の接触体験で、交流群は56%弱の者がこれまで身体や心に障害を持った人と話をしたり、友達になった経験を持っているが、非交流群は36%強でしかない。以上のように現代の中学生は十分な障害者情報は得ており、しかも実際の接触経験も非交流群でも3分の1以上は持っている。しかし小出（1981）も述べているように、障害者との接触経験が一概に障害者に対する理解推進、態度改善に作用するわけではない。時にはその理解・態度の水準の低下もみられる。そこで本論文は上谷（1992）の調査で最も交流に熱心であった交流群のクラスと、非交流群の平均的クラスの障害者に対する意識を比較検討することによって、交流の障害者意識に対する効果を調べることを目的とする。

II. 実験方法

1. 被験者

被験者選定の理由及び人数

この実験は視聴題材を被験者に提示し、その感想文を分析することによって、障害者意識を明らかにするものである。被験者は青年期に入り情緒が成熟し、自分の意識を十分に言語化できしかも自分の意識をストレートに表現する中学生を選んだ。中学校の中から特殊教育諸学校と交流を行なっている学校（交流校）の中から最も交流に熱心で、クラス内に障害者のいない2年生1クラスを選んだ。コントロール群として全くそうした学校とは交流を行っていない学校（非交流校）のやはりクラス内に障害者のいない2年生2クラスを選んだ。被験者の人数は表1に示すように交流群男子13名、女子17名、計30名。非交流群男子36名、女子36名、計70名であった。

表1 被験者の人数

	交流群男子	交流群女子	小計	非交流群男子	非交流群女子	小計	合計
人数(人)	13	17	30	37	35	72	102

交流群

函館市内の新興住宅地にある中学校で、1学年4クラスの中規模校である。学校には特殊学級はない。学区内には肢体不自由養護学校、精神薄弱者施設、精神科の病院および特別養護老人ホームがあり、その肢体不自由養護学校と交流を行なっている。学区内の小学校もやはり同じ養護学校と交流を行なっている。

非交流群

函館市内にあるが、交流群とは異なる新興住宅地にある中学校で、1学年11クラスの大規模校である。学区内には障害者の為の施設及び学校は存在せず、学校には特殊学級もない。特殊教育諸学校との交流も行っていない。学区内のどの小学校もそうした学校と交流は行っていない。

2. 実験年月日

交流群：1991年10月7日13時30分から14時30分。

非交流群：1991年8月24日9時40分から10時30分。

3. 実験場所

それぞれの学校の図書館及び視聴覚教室

4. 呈示題材

指示題材選定理由

提示題材は上谷（1992）の調査で現代の中学生が最もその情報を獲得し、交流群が日頃交流を行っている肢体不自由者で、障害の状態が誰にでも分かりやすく、視聴結果障害者イメージになるべくマイナスの効果を与えにくい、しかも中学生に理解しやすいものを選んだ。

提示題材

1990年12月7日（金曜日）NHKの午前8時半からの番組、おはようジャーナルの「障害者のための絵画教室」で放映されたものを20分にまとめて用いた。内容は次のようなものである。

兵庫県西宮のある公民館で週2回絵画教室が開かれている。主催者は障害者と健常者が一緒に絵を描くことでお互いを認め合う心を育てたいと考えている。その絵画教室に通う30歳と35歳の2人の障害者が主人公である。2人共女性で、重度の言語障害をもった、アテトーゼ型脳性マヒ者である。1人は上肢下肢共に障害がある。座位がとれ、いざり歩きはできるが、生活は全介助である。普段は車椅子生活をしており、母親が介助者である。絵画教室に20年通って油絵を習っている。父親は8年前に亡くなり、亡父が学生時代に描いた仏画に惹かれ、3年前から本人も仏像を描くようになった。絵を描くときは絵の具の調合を介助者にしてもらい、筆につけてもらい、さらにその筆を手握らせてもらわなければならない。キャンバスをなめんばかりにして一筆一筆時間を掛けて描く。1枚の絵を描くのに少なくとも半年かかる。その絵が初めて売れた。将来プロとして絵で生活することは出来ないだろうが、今は絵を描くことに打ち込んでいる。これからも今住んでいる自宅で暮らしたいという要望をもっており、介助者である母親と別れた時のために市の施設で訓練も受けている。

もう1人は上肢は全く使えないが、下肢には障害がほとんど認められない。3歳頃から足の指に鉛筆をはさんで絵を描き始めた。絵が大好きである。養護学校を卒業し印刷工場で6ヶ月勤務したが、頑張りすぎて体をこわし、辞めた。それ以降はプロの画家として生計を立てる決心をした。絵のためならなんでもやる気構えである。4人家族で、家族が忙しい時は皆の夕食を1人で作る。テーブルの上に腰掛けて足で全てのことをする。包丁も使うし鋏みも使う。火も水も使う。料理もお花も字も書くことも大変上手である。20歳の時から個展を開き、現在では絵が売れるようになった。1989年には世界身体障害者芸術家協会、障害者の奨学金給付生に選ばれたし、台湾で開かれる芸術展覧会の日本代表にも選ばれた。生活は有料介護者の助けを借りて自活している。

5. 手続き

被験者をそれぞれの学校の図書室及び視聴覚教室に連れて行き、「これから身体が不自由な人のでてくるビデオを見てもらいます。後でそれについて感想を書いてもらいますのでしっかりと見ていてください。視聴時間は約20分です」と教示して視聴題材を放映した。視聴を終えた後ただちにB4

の用紙を1枚渡し「今見たビデオについて感じたこと、思ったことを、この用紙に自由に書いてください。できるだけたくさん書いてください。箇条書きでも構いません。用紙は裏表使っても構いませんし、必要であればもう1枚別の用紙を差し上げますので、申し出てください。」と教示して感想文を書いてもらった。時間は約40分であった。

III. 結果及び考察

被験者に書いてもらった感想文を、個人毎に単文に分解し、その単文を内容面と感情表現面の2側面から分析し考察を加えた。

1. 文章内容の分析

単文の意味内容を障害者との関係で見えていくと、表2に示す11のカテゴリーに分けることができた。11のカテゴリーを障害者との関係の深さでランク付けし、1から順に番号を符ってラベル付けた。各カテゴリーの意味内容及びランクについては後に述べる。

次に各単文が、どのカテゴリーに属するかを判断し、個人毎にどのカテゴリーが含まれるかプロットしたものが図1-1から図1-4である。縦軸は個人ラベルで、横軸はカテゴリーラベルである。個人ラベルと各カテゴリーラベルとの交点が黒く塗られている場合、その個人はそのカテゴリーレベルの文章を書いていることを表している。

この表から各個人がどのカテゴリーレベルの文章記述を行なっているか明らかになるし、図1-1から図1-4までを比較することによって、性差及び交流群と非交流群との差も明らかになる。例えば図1-1において個人番号1の者は交流群男子であり、1、4、6及び7のカテゴリーを含む文章を書いていたことが分かる。同じく図1-3において個人番号4の者は交流群男子であり、1及び2のカテゴリーを含む文章しか書いていないことが分かる。ただし今回は書かれた文章の量は問題にできなかった。

次に交流群と非交流群及び男性と女性の群間差を見るために、図1-1から図1-4までに表されているカテゴリーに、それぞれ1点ずつを与え点数化した。そのようにして点数化したものを交流群、非交流群及び全体で、それぞれ男性、女性、その合計別に集計したものを示したものが表3である。

表3において、有効平均文章個数とは、個人の書かれた単文の内、同じカテゴリーに属するものは全体で1とカウントし、異なったカテゴリーに属する単文が現われた時のみカウントし、人数分

表2 内容分析カテゴリー

	記述内容
1	単なるビデオの主人公の行動についての記述
2	障害者の能力、努力についての記述
3	介助者、先生についての記述
4	障害者の存在についての考えの記述
5	身の回りの障害者についての記述
6	自分と障害者とのかかわりについての記述
7	障害者と自分を比較した記述
8	自分が障害者になった場合を考えた記述
9	障害者差別についての記述
10	障害者に対する社会の役割についての記述
11	障害者に対する自分の役割についての考の記述

表3 交流群及び非交流群の男女別平均カテゴリー数

	全 体			交 流 群			非交流群		
	男子	女子	合計	男子	女子	小計	男子	女子	小計
有効平均文章個数	3.7	4.3	4.0	4.6	5.3	5.0	3.4	3.8	3.6

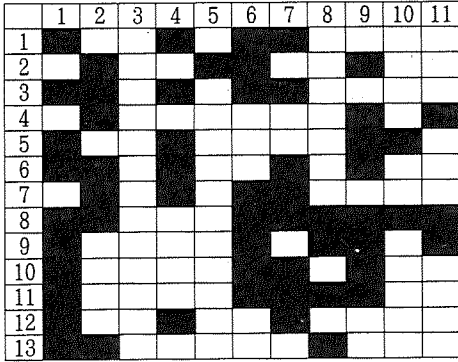


図1-1 交流群男子の感想文におけるカテゴリー分布

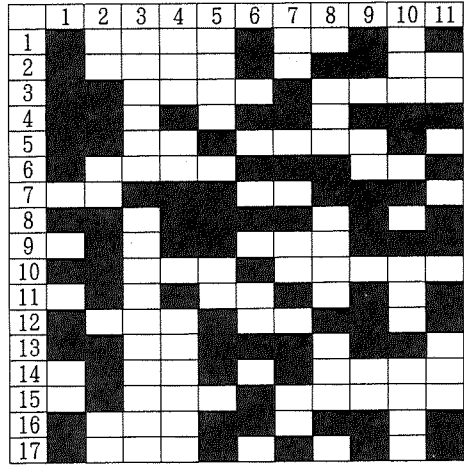


図1-2 交流群女子の感想文におけるカテゴリー分布

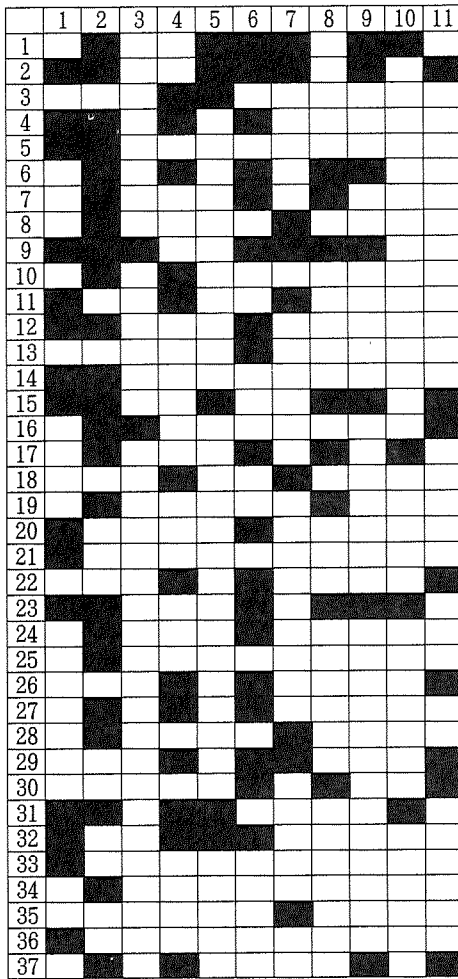


図1-3 非交流群男子の感想文におけるカテゴリー分布

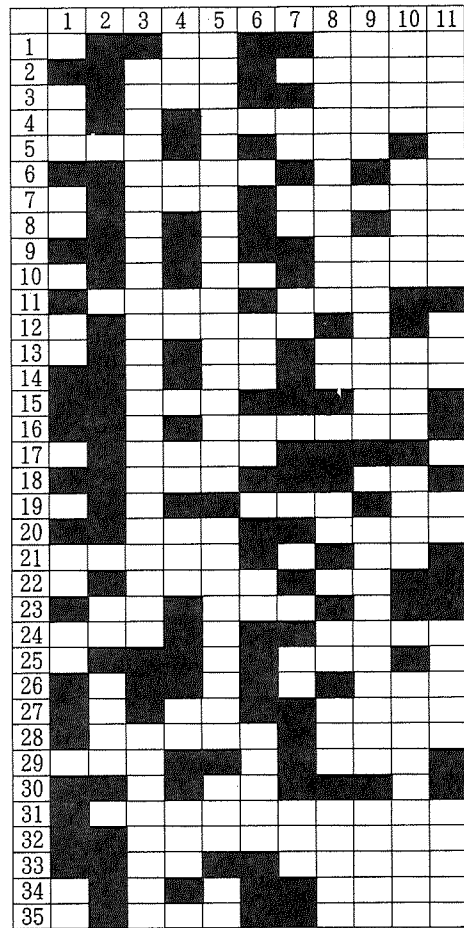


図1-4 非交流群女子の感想文におけるカテゴリー分布

合計し、それぞれの人数で割ったものである。したがって最高点は11である。

この表3から被験者全体では4種類のカテゴリーを含んだ文章を書いている、男子は3.7、女子は4.3である。女子は男子に比べ、カテゴリーを多く含んだ文章を書いていることが分かる。交流群と非交流群を比較すると、交流群は5.0で非交流群は3.6であり、交流群が非交流群に比べ多くのカテゴリーを含む文章を書いていることが分かる。交流群と非交流群をそれぞれ性別に見てみると、

表4 交流群および非交流群男女における各カテゴリーの頻度

	全 体			交 流 群			非交流群		
	男子	女子	合計	男子	女子	合計	男子	女子	合計
	%	%	%	%	%	%	%	%	%
単なる主人公の行動の記述	50.0	50.0	50.0	76.9	64.7	70.0	40.5	42.9	41.7
障害者の能力、努力についての記述	60.0	61.5	60.8	38.5	52.9	46.8	67.6	65.7	66.7
介助者、先生についての記述	2.0	13.5	7.8	0.0	11.8	6.7	2.7	14.3	8.3
障害者の存在について考えた記述	60.0	69.2	64.7	76.9	64.7	70.0	54.1	71.4	62.5
身の回りの障害者についての記述	10.0	25.0	17.6	7.7	52.9	33.3	10.8	11.4	11.1
障害者の見方についての記述	56.0	44.2	50.0	76.9	52.9	63.3	48.6	40.4	44.4
障害者と自分を比較した記述	40.0	48.1	44.1	53.8	58.8	56.7	35.1	42.9	38.9
自分が障害者になった場合を考えた記述	30.0	23.1	26.5	30.8	29.4	30.0	29.7	20.0	25.0
障害者差別についての記述	32.0	36.5	34.3	61.5	64.7	63.3	21.6	22.9	22.2
障害者に対する社会の在り方についての記述	14.0	25.0	19.6	15.4	35.3	26.7	13.5	20.0	16.7
障害者に対する自分の役割について考えた記述	22.0	32.7	27.5	23.1	41.2	33.3	21.6	28.6	25.0

交流群男子は4.6、女子は5.3で、非交流群男子は3.4、女子は3.8で、両群とも女子が男子より多少多いが差は少ない。

以上の結果から、女性は男性に比べ障害者を見る際多少多くのカテゴリーを含む見方をしている。交流群を非交流群に比べ男子、女子共障害者を見る際多くのカテゴリー含む見方をしていると言える。交流は性の別を問わず、障害者に対する考え方をより深くさせるものと思われる。

次に各カテゴリーがどのような割合で出現するか、交流群、非交流群及び全体の男女について示したものが表4である。全体で見ると、障害者の存在について考えた記述、カテゴリー4が最も多く64.7%である。交流群、非交流群通して全体の64.7%の者が、このカテゴリーを含んでいる文章を書いていることを表している。男子は60.0%女子は69.2%で女性が多い。次に出現の多い順に見ていくと障害者の能力、努力についての記述、カテゴリー2、単なる主人公の行動の記述カテゴリー1と続く。それぞれ60.8%及び50.0%で、男女差は全く無い。障害者に対する見方についての記述、カテゴリー6は50.0%で男子56.0%、女子44.2%で男子が多い。障害者と自分を比較した記述、カテゴリー7は44.1%で、男子は40.0%女子は48.1%でわずかに女子が多い。障害者差別についての記述、カテゴリー9は34.3%で男子32.0%、女子36.5%でこれも女子がわずかに多い。障害者に対する自分の役割について考えた記述、カテゴリー11は27.5%で男子22.0%、女子32.7%で女子が多い。自分が障害者になった場合を考えた記述、カテゴリー8は26.5%で男子30.0%、女子23.1%でわずかに男子が多い。障害者に対する社会の在り方についての記述、カテゴリー10は19.6%で男子14.0%、女子25.0%で女子が多い。最後は介助者、先生についての記述、カテゴリー3で7.8%で男子は2.0%女子は13.5%で女子が多い。

カテゴリー1と2はあまり内容分析には役に立たないので、カテゴリー3以降を見ていくことに

する。交流群と非交流群を比較してみると、カテゴリー4は交流群70.0%、非交流群は62.5%で交流群が多い。男女別で見ると交流群男子76.9%、女子64.7%、非交流群男子54.1%、女子71.4%で、交流群では男子が多いが、非交流群では女子が多い。カテゴリー6は交流群48.6%、非交流群44.4%でわずかに交流群が多い。男女別に見ると交流群男子76.9%、女子52.9%、非交流群男子48.6%、女子40.4%で両群共男子が多い。カテゴリー7は交流群56.7%、非交流群38.9%で交流群が多い。男女別に見ると交流群男子53.8%、女子58.8%、非交流群男子35.1%、女子42.9%で両群共女子が多い傾向がある。カテゴリー8は交流群30.0%、非交流群25.0%。カテゴリー11は交流群33.3%、非交流群25.0%でこの2つのカテゴリーとも交流群が多い。カテゴリー10は交流群26.7%非交流群16.7%で交流群が多い。男女別に見ると交流群男子15.4%、女子35.3%、非交流群男子13.5%、女子20.0%で両群とも女子が多い。カテゴリー4は交流群33.3%、非交流群11.0%で交流群が多い。男女別では交流群男子7.7%、女子52.9%、非交流群男子10.8%、女子11.4%で交流群女子のみが極端に多い。カテゴリー3は交流群6.7%、非交流群8.3%で両群とも10%以下と少ない。男女別に見ると交流群男子0.0%、女子11.8%、非交流群男子2.7%、女子14.3%で両群とも女子が多い。

以上の結果から全体ではカテゴリー4とカテゴリー6が50%以上で多い。中学生にとって障害者が、日常あまりにも疎遠であることを物語っているものと思われる。また中学生にとって障害者は不幸な存在であり、疎ましい存在であることも伺われる。逆にカテゴリー3、5および10は低い。実際の生活では自分の身の周りに障害者が存在しないため、ビデオで障害者を見せられても、参照すべきモデルがないものと思われる。よって社会が障害者にとってどうあるべきかという問題提起もする者が少ないのであろう。カテゴリー3が少ないのは、障害者を世話している人を、実際には見たことがないので頭に浮かび難いのと、女子に特有の反応であるのは、ビデオの介助者が母親であった事が大きく影響しているものと思われる。あるいは日頃から女子は弱い人を介護するのが女性の役割だと思っているのかも知れない。

交流群と非交流群との比較では、カテゴリー4からカテゴリー11までは交流群が非交流群より多い。特にカテゴリー5以降は非交流群が多い。カテゴリー5は交流群は障害者と接する機会の多い環境に住んでおり、しかも肢体不自由養護学校と交流しているため、1人の障害者を見て他の多くの障害者の事が頭に浮かんでくるものと思われる。非交流群はビデオの主人公の事だけに考えが集中し他の障害者の存在など考えられないものと思われる。そのことはカテゴリー2が多いことから裏付けられる。同じ理由がそれ以降のカテゴリーについても言えるが、カテゴリー9の両群の差はいかにも大きい。障害者差別が存在することを一般の中学生は、日頃ほとんど意識していない事を物語っているように思われる。交流教育が身の回りの障害者に目を向けさせるだけでなく、差別の存在を意識させることに大きく貢献していることが明らかになった。交流群は障害者差別の存在を意識しているために、障害者でない自分が障害者に何がしてやれるか、あるいは社会が何をしないといけないか、考えが深まっているものと思われる。カテゴリー6については、次の対障害者感情のところで分析を進めるが、このカテゴリーの分析で、障害者に対する意識、感情を明らかにできる。このカテゴリーが多いからといって必ずしも障害者に対する意識、感情が友好的とは必ずしも言えない。中身つまり書かれた文章そのものを問題にしなければならない。今回実験した中学生は、交流をするしないにかかわらず共通して障害者を「身体が不自由な人は気の毒だと強く思った。今日のテレビ番組を見て私はかわいそうだと思う。私達の不幸とかをいっぺんに神様がくれちゃったような人達なんだと私は障害者についてそう思う。はっきり言って身体障害者の人達は植物人間のように何も考えられない人達だと思っていた。これだけの人達がこんな障害にあって直らない

のはちょっと悲惨だと思った。」という文章に示されるように、かわいそうな者、不幸な者、何もできない者と見ていることが分かる。さらに「このテレビを視て最初笑ってしまった。その人たちの気持ちは私が理解できるといったら嘘になってしまうし、私には理解できないと思う。」という文章に表されるように障害者は理解できない者、笑いの対象になる者なのである。「私は体も丈夫で不自由なく動ける。物凄く幸せなこと。今更ながら私を丈夫に生んでくれた両親に感謝している。」の文章で表現されるように自分は障害者になりたくないのである。そのことから「もう障害を持った人がこれ以上増えなければいいと思う。」の文章で分かるように障害者の存在を認めようとしないのである。一方で障害者に対して理解し、受け入れようとする傾向も伺われる「だから体は少し違うけど心の中は全く同じ人間だと思った。」障害者も同じ人間ではないか、一緒に生活しようではないか。そのためには「でも僕達は彼らと交流する機会がないので彼らの生活や苦しみがよく分からない。」と言わせないためにも、よりよい交流教育を推進する必要があるのではないだろうか。結論から言うと、現在行なわれている様な形の交流教育は、障害者に対する知識は広めるけれども、健常者の意識、感情までは変革できないという限界を浮き彫りにしている。

カテゴリー分析

ここで用いたカテゴリーを被験者の実際に書いた文章を引用しながら説明していく。

カテゴリー1：単なる主人公の行動の記述。ビデオの主人公が示す行動の単なる記録、あるいは珍しいものを見た驚きを表現したもので、被験者は自分の障害者に対する気持ちを何も表明していない。そこでカテゴリーの中では最も低レベルなものと位置付けた。カテゴリー1に分類した文章は次のものである。「足だけで御飯を作ったり絵を描いたりして、とてもすごい。特に足の指で包丁をもって玉葱を切るなんてびっくりした。手で描ける人よりも足で巧く描くのはとても感動しました。身体に障害があってもとても絵が巧いと思った。そしてすごく明るいのでとてもすごいと思った。障害のある人が絵を描く姿にとっても感心した。僕は障害者の人をテレビで視て、身体が不自由なのに足とかで絵を描いているのを見て、よく足で絵を描けるな、そして絵なんか描いているのを見て文字も絵も上手に書いて料理までやってしまうとはすごいと思った。でも、足で描いているのにプロくらいのすばらしい絵だ。」

カテゴリー2：障害者の能力、行動についての記述。カテゴリー1よりは上にランクされるが、ここでも被験者は、ビデオの主人公の努力、能力等に驚いているだけである。カテゴリー2に分類した文章は次のものである。「体が不自由なのに一生懸命生きている姿はすばらしい。僕達の10倍も100倍も練習してここまで頑張ってきたんだと思う。とてもすごい才能だと思う。私達が出来ないようなことを、それぞれの障害をのりこえて自分達でできることは全部していることにも感心しました。障害者の人達があんなに強い意志をもって何をするにも一生懸命やっている姿にとっても感心しました。障害者がどんな障害をもっているでも自分の進む道を決めてそれを職業として頑張っているのとても感心しました。絵などを描くにしてもからだに障害があれば筆を持ったり筆を動かしたりするだけでどれだけの努力をしているのか、そしてどうしてそれだけ不自由でも描けるのか不思議に思った。身体が不自由で言葉も手先も器用ではないのにあれだけ巧く書けるのはやっぱり頑張ってあそこまできたからだと思う。身体に障害があっても、それを乗り越えて色々な事ができるのを視たときすごいと思いました。私達からだの不自由ではない人からだが不自由な人ではやっぱり身体が不自由な人の方が才能があると思います。一生懸命絵を描いているところを視てそう思った。身体が不自由なのに希望を捨てないでなにかにチャレンジすることはすごいことだと思う。障害者の人達はいろんなところで苦勞していて私達が普段やっていることでも頑張ってやっていたんだなあと思った。それにしっかりしている人が多い。」

カテゴリー3：介助者、先生についての記述。障害者は身体にハンディーを背負っているため、多くの場合介助者が必要で、介助者の重要性は今更言うまでもないことである。また障害者はそのハンディーのために先生の影響を大きく受ける。このように障害者を見る時、障害者自身より介助者や先生の方により大きな比重を置くことが大切である。しかし中学生ではそこまではなかなか注意が回らないのでランクを3にした。カテゴリー3に分類した文章は次のものである。「絵の先生も偉いとゆうよりもすごいと思った。自分の子供があのようになっても見捨てないで色々なところを連れて行ってあげたりする親は当たり前だけど偉いと思う。そんな人達の家族の人達の方がとてもつらい思いをしていると思います。それから先生達のやさしさもすばらしかった。だから先生達にも、これからもみんなに尽くしてもらいたいですね。お母さんやそこに勤めている人達はすごいと思う。同時に障害者の両親もつらくないはずがないと思う。ビデオを視ているなかで私はこの人達を面倒視てくれている親もいずれいなくなる。そうしたらどうするんだろうと考えました。」

カテゴリー4：障害者の存在についての記述。現代はセグレーションの最も進んだ社会で、健全者は特別の機会以外には障害者と接触することはない。従って障害者の存在を意識する機会も少ない。そんな中で健全者である中学生が障害者の存在をどのように意識しているか、明らかにできるカテゴリーであるが、障害者に対する積極性に欠けるので、ランクは4にした。カテゴリー4に分類した文章は次のものである。「世の中には苦勞をしながらも必至に生きている人がいることが分かった。世の中には障害を持った人でも僕達より一生懸命生きている人がたくさんいるということが分かった。僕は画面を視ていて思ったことは、僕達と障害者は全然変わりないと思った。ただ障害者は体や手が不自由だから変わりないと僕は思っていました。他人から視ての話だが、彼らは身をもって普通の生活のすばらしさを教えてくれたような気がした。身体障害者とは、身近じゃないようでとても身近だと思った。最初障害を身体に持っている人が世界中にたくさんいるということは色々聞いたことがあったけれども、聞いたのは大体目が見えなかったり耳が聞こえなかったり手足が不自由だったりした人達が普通の人達のように自分の力で頑張っているということだったが、これを視て脳が麻痺しているせいで全身が自分の力を全部ださないと動けなかったりする人達がいるということを知った。自分が障害者でも他の人に見て喜んでもらおうと思いついた。絵だけでなく生け花にも挑戦している姿や、色々な写生会に足を運び普通の人に負けない絵を描いているところ。自分は言葉があまり上手ではないのでワープロで打って相手に伝えるところなどきちんと普通の生活をしていると思った。障害者の中には重度の障害を持ち、助けてもらわなければ生活できない人や、軽い障害で自分の身の回りのことは何とかできるという人、色々な人がいると思う。日本だけじゃなくこのような人はたくさんいると思う。私は身体障害者と頭で考えただけでもピンと来ないことだった。身体障害者だからといって何もできないことはない。障害者が社会で自立するという半面、私達は障害者にあまり関心がないと思う。障害者が自立する手段はほとんど芸術面しかないこのテレビ番組で思った。」

カテゴリー5：身の回りの障害者についての記述。カテゴリー4の所でも述べたが、現代の中学生は交流の機会でもなければ、障害者を意識できなくなっている。このカテゴリーは被験者が自分の近くに息をひそめて生活する障害者をどれだけ意識しているかをチェックするため設けた。ランクは5である。カテゴリー5に分類した文章は次のものである。「うちの学校の近くにもそういう人たちのいる学校がある。ぼくたちが小学生の頃、うちの学校の学芸会を毎年観にきていた、ただ観るだけでなく一緒にうたを歌った。私の学校の近くにもこの人達がいる養護学校が在り、時々歩いて散歩しているのを見かけます。その時に私達は笑ったり馬鹿にしたりするようなことを言う人がいてどうしてこの人達の気持ちが理解できなかったのかと申し訳ないと思う。テレビを見て私は一

度手が肩のところについて足で何でもする映画を見たことがある。今日の番組も同じような番組で足で字や絵を描くことはすばらしい。私は向かいに養護学校が在るのに障害をもった人の気持ちなど考えたことはなかった。私には身近にそういう人が2人いてどれだけつらいとか苦しいかと少し知っているつもりでした。けれどあんなに努力しているとは思いませんでした。本当にすごいと思いました。僕の家ではたまたま母が障害をもっている子を預かっていますが、その子は6歳でも身長が10箇月の赤ちゃんと変わらない子供を預かっています。言葉を話すことは出来なくても手や足などでちゃんと物を取ったり足で歩いたりしています。身近に障害をもった子供がいることなので障害をもった人のことは少し分かりますが、やはり自分では悩んでいるのか、他人の心は分かりませんが、やはり障害を持っているからといって差別などをしたらいけないと思います。私には身体が不自由な友達があります。それも私より2つ年上の高1の男の人です。その男の人は言葉は何か分かるのですが足が不自由なんです。でも彼は急な坂道を自転車で一息懸命に昇ったり、驚くことに羽球もできます。私は障害者でも一生懸命にやれば普通の人と同じことができる。普通の人と同じく学べると何時も彼といるときはそう思います。私の小学校には下半身が不自由な人がいました。私より2つ年下の男の子でした。その子は、お母さんに帰りと朝送り迎えをしてもらって学校へ通っていました。お母さんが教室で運ぶところもありましたが、ほとんど同じクラスの男の子や女の子が周りの世話をしました。その子のために階段に手摺りがついたことも覚えています。でも私は一度もその子に手を貸してあげることはできませんでした。なぜなのかは分からないのです。勝手に忘れているのかも知れません。」

カテゴリー6：障害者に対する見方についての記述。このカテゴリーは健常者が障害者をどのような目で見ているかを調べるものである。障害者はかわいそう、障害者になることは不幸なことだ、障害者は見ると笑ってしまう等、障害者に対する中学生の本音が抽出できる。障害者に対する差別意識価値観なども分かる。カテゴリー6に分類した文章は次のものである。「このテレビを視て最初笑ってしまった。これだけの人達がこんな障害にあって直らないのはちょっと悲惨だと思った。一瞬の出来事によって障害者という長い病を背負って生きていかねばならないと思うとかわいそう頑張っているという気持ちがいつべんにでてくるような気がします。自分は何りたくないみんなが思っているけれど勝手にになってしまうのがこわいです。こんな人達は自分ではなりたいたいと思っていないのに障害にかかるなんて、とか思った。今テレビを見て最初は授業が潰れて嬉しいなんて軽い気持ちで見えていたが見ていて障害をもった人のつらさ大変さなどよく分かった。私達の不幸とかをいつべんに神様がくれちゃったような人達なんだと私は障害者についてそう思う。障害ってことがどんなに重いことなのか思い知らされた。はっきり言って身体障害者の人達は植物人間のように何も考えられない人達だと思っていたがこのテレビを見てその人の気持ちがすごく良く分かった。大変な苦勞をしていると思った。障害者の人達は自分達がとてもつらいときと同じような様な気がした。文字でしか満足に感じたことを伝えられなくてとても哀れに思いました。やっぱり何処か不便だと、私だったら話し掛けづらいし、一緒に行動できなくて、ついていけないと正直言っています。やっぱり何かと不便だと思った。でもからだが不自由なためにやりたいことが思うようにいかず一度は落ち込んでしまったことがあるとおもいます。今自分達は普通の暮らしをしている。体は少し違うけど心の中は全く同じ人間だと想った。僕はこの番組を視て障害者の心の強さを感じた。私は体も丈夫で不自由なく動ける。物凄く幸せなこと。もう障害を持った人がこれ以上増えなければいいと思う。このビデオを見て身体障害者の一人一人が絵を通じて力強く生きていると思った。障害者だってパソコンや色々機械をいじれるんだから、普通の会社でも働けると思った。僕達は彼らと交流する機会がないので彼らの生活や苦しみがよく分からない。」

カテゴリー7：障害者と自分を比較した記述。障害者に比べて自分は一生懸命にこの世を生きているだろうか。中学生が障害者を見ることによって、自分の生き方をどれだけ意識しているかを見るカテゴリーである。カテゴリー7に分類した文章は次のものである。「大変色々思うことがある。私はこのように手や足がきちんと使える。でもその人達のように足では字は書けない。私は手で絵を描いています。しかし足で描いている人達の絵の方が生き生きとしそして延び延びと描いてある。今まで自分は障害者の人達を自分達と違うからと思って冷たい目で見てきたけれど、これからは障害者も健常者に負けない努力しているのなら私達も障害者を助けてあげられるように障害者よりもたくさん努力を積み重ねて生きていかななくてはと思った。障害を持っていても一生懸命頑張っているのに、障害を持っていない私達がだらけていてすごく恥ずかしい気がした。普段僕達はなにかと理由をつけて止めたりあきらめたりすることがあるがそれが大きな間違いだということ強く感じた。そして上手下手関係なく努力することが大切だと思った。障害者は絵を描いたり色々取柄があるからいいけど、僕なら全然取柄がないから悲惨だ。身体障害者じゃない私達みたいな人達は手も足も思うように動かせるけど、障害者達は自分の思う行動がとれなくても心がきれいです。私は身体が不自由でもあれだけすばらしい才能をもって障害がなかったらもっとすばらしい絵を描けたかも知れない。そして身体の不自由な人がいろんなことをやって頑張っているのを見ると、こういう人達も頑張っているんだから、どこも不自由でないわたしが頑張らなくてどうすると大変励みになります。健康な人達が何時までも親元にて甘んじられているのが、恥ずかしく思います。私は彼女達の辛抱強さと忍耐と努力を見習いたいです。ずっとビデオを見てると何か悲しくなってきた自分はあまり努力をしていないのにこの人達は人の何倍も努力をして自分のやりたい事しなければならぬことを果している。例えば僕は障害者のやったことをやったとしたら障害者の人のように巧いかないなと思う。」

カテゴリー8：自分が障害者になった場合を考えた記述。もしも自分が障害者になったらどうなるだろうという考えはだれでも一度は抱く不安であろうが、中学生はいったいどんなイメージを障害者に抱いているか計るカテゴリーである。カテゴリー8に分類した文章は次のものである。「もし私が障害をもっていたら今この場所にはいなく養護学校に通っていたことだろう。もし私が身体障害者だったら木村さん達のように明るくそしてあんなに器用にはくらしません。みんな嫌がるかも知れないけど、でも自分が体が不自由だったらと考えるととてもほおってはおけないと思う。もし私がその人達だったらその人達のように生活していない。毎日苦しんで生活をしていたと思う。僕がああいうふうになったらなどいつも思います。僕ならあんなに死にたいと思う。けどあの人は決して人前ではつらさなどを見せずただひたすら生き続けている。喋ることも出来ないし自分と比べるとかなり不自由で自分がもしそうになったら、何をしているだろうと思った。きっと何もしないでただそのまま生きていただけだったと思った。僕ら見たく体が自由な人は不自由な人の気持ちは分らないと思う。私が障害を持っていたら、みんなに変な目で見られると思う。自分がその人の立場になったら、生きていくことができないと思う。自分が今は自由だけど、いつ何かあって障害者になったら一人でテレビのように何でもできるかと不安になります。でもやっぱり私達のようになにも障害を持っていない人にとって障害者の悲しみ苦しみは分らないと思う。もし私が障害者だったら、きっと家から外にでないと。何もできなかったと思う。自分があんなようになったら死にたいなどと思う様な気がする。もし私のからだの不自由だったら耐えられません。もし僕がなっていたら親の手ばかりかけて自分では何もできないと思う。」

カテゴリー9：障害者差別についての記述。中学生が一体障害者差別をどれほど意識しているか。障害者差別とは何かについて考えているか。調べるために設けたカテゴリーである。カテゴリー9

に分類した文章は次のものである。「今までは障害をもった人なんてと差別したけど、今ではそういう気持ちにはなれない。私は嫌がる人が不自由な人になって何もかも自分でしてみたら、不自由な人の苦しさやつらさを分かると思った。よく町の中を身体障害者が通るとみんなよけて歩いていってから「何あの人」「変な人」「気持ち悪い」とか色々いって馬鹿にしている。もし自分がその人の立場になって考えて欲しい。中学1年の頃教室の窓からその人たちに呼んだりして振り向いたら隠れるということを一時期していた。障害を持っているからといって差別してはいけないということが分かった。番組を見て少し笑ってしまったけどそれは障害者の人達を馬鹿にしたことだと思った。とても悪いことをしたと思った。障害者を見ると笑ったり馬鹿にしたりするのだ。私はそういう人達を見かけたことがあるが、その人達を殴りたくなった。よく町を歩いていると、障害者とかみりけど障害者用の電話ボックスに普通の人が入って障害者が外で待っていたり、物を取ろうとすると取れなかったりする人がいるとか、障害者が町で歩いていると馬鹿にしたりする人がいますが、馬鹿にしたりする人の方が心の障害者だと思います。外から見ると色々触れ合ってみると体が思ったとおり動かないだけであとは普通の人なので笑ったり冷やかしたりしている人に腹が立ちます。彼らは僕達と同じ権利を持っているし、同じような生活をしている。あのような人は周りの人々からどのように思われているのだろう。こういう人達を馬鹿にする人もいるけれど馬鹿にされているこの身体障害者達は笑われても白い目で見られても自分なりに目一杯生きている。もし自分達がそうなったらどんな気持ちになるかも少し身近に考えていきたいと思う。」

カテゴリー：10 障害者に対する社会の在り方についての記述。障害者との接触経験のそんなに豊富でない中学生、しかも社会をあまり知らない中学生が社会は障害者に対しどんな役割を担っているかなければならないか考えているかを見るカテゴリーである。カテゴリー10に分類した文章は次のものである。「何という表現を使うべきか分からないが、世間の人にもう少し身体障害者を理解することに興味をもって欲しい。最近の人はこのような身体障害者に対する関心がほとんどないけど、こういうビデオをもっとみんなに広めたら関心が増えると思う。身体障害者の人々を世話している人または家族、親がいなくなったらどうになってしまうのだろうかと思った。毎日いっしょにいた人が急にいなくなってしまう。こんなことのないように世話する人を増やす運動を起せばいいと思った。障害のある人も自分から積極的に社会に参加するようにして、健常者と交流を深めることも大切だと思った。障害を持っている人と持っていない人との交流をもっと増やして欲しいと思う。もっと住みやすく暮らしやすい環境を作っていったり親切にしたりいろんなことをしなければならなかった。早く僕達と障害者の人達が完全に結びついてくれるといいなあと思いました。もうすこし障害者の事を考え、企業も障害を持つけれど実力がある人達をどんどん伸ばしていって欲しいと思う。もっとこういう人が社会にでも安心できるような世の中になればいいと思う。障害を持っていてもみんな同じ人間なんだから頑張って自立して普通に仕事などをできるようにして周りの人もそういう人を受け入れてあげるといいと思う。かわいそうと視る人がいるけれど、それよりもその人の方が不便なことをやってあげたり、おしえてあげたり、話相手になったりして、お互いの心が通じ合うことが大切だと思う。障害をもった人は自分なりに普通の人には負けないという心を持っているんだろうと思うから障害をもった人には普通の人より素敵な能力などを持っているのだから障害をもった人を大切にすることが、日本は障害をもっているからといって差別しないことが日本を明るくすることだと思えます。身体が不自由な人のための高校や小中学生の学校を作りたいです。僕達は彼らとたくさん交流して、協力する必要があると思う。」

カテゴリー11：障害者に対する自分の役割について考えた記述。社会が障害者の為にこうあったらいいな。と漠然とと思っている段階から、一歩進んで一体自分には障害者に対して何をやる義務が

あるか考えているかどうかを調べるカテゴリである。カテゴリ 10 に分類した文章は次のものである。「障害をもっている人を特別な目で見えてはいけない、差別してはいけないと私は思います。逆に助けてあげなければならないと思う。私達は障害ではないけれど、もし道で障害に会った時は、じろじろ見ず普通に接したい。同じ人間なのだから。何時私達も障害者になるか分からないので今身体が自由に動くときに色々してあげたいと思います。偉そうなことをここで言ってしまった私から偏見を消していききたい。そして障害者も健常者と同じ人間なのだからもっと障害者を健常者が同じ人間なのだと意識して共に生活していききたいと思った。同情とか情とかで付き合うのではなく本当の友情とかを求めて本当の友達としてそうゆう人達と付き合っていきたい。障害者の人達の不自由なところを補っていくのは僕達の役目だと思います。これから私達は障害者について考えなきゃいけないと思いました。私も何か役にたちたいと思いました。その人達のためにももっと自由な環

表 5 障害者に対する感情分析

	全 体			交 流 群			非交流群		
	男子	女子	合計	男子	女子	合計	男子	女子	合計
	%	%	%	%	%	%	%	%	%
ネガティブな感情	60.0	57.7	58.8	61.5	64.7	63.3	59.5	54.3	56.9
ポジティブな感情	94.0	88.5	91.2	100.0	94.1	96.7	91.9	85.7	88.9

境を作ってあげたい。そんなふうに思います。一度障害者の人と触れ合ってみたい。将来福祉関係の仕事につきたい。こういう人を視かけるといやだなあと何時も思ってたけれど、今度からは困っていたら助けてあげようと思う。私ももっとこういう人達が生活しやすい環境を作ってあげないとだめだと思う。この人達を見ても馬鹿にせず助けていくのが僕達にとってこの人達に対する一番良いことではないかと僕は思います。僕も今度から障害者について色々考えてみたいと思っている。そしてこのビデオを見て為になり良かったです。そんな人達が困っているときにはやはり僕達が助けなければならない。しかもその時は決まっておらず突然訪れてくる。その時にきちんと対応できるような人になりたい。今度僕は自分達を見つめ直さなければならないと思う。」

カテゴリ 6 の分析の際問題となったが、交流を行なっていれば、障害者意識がはたして改善されるものなのであろうか。これまでの研究でもこの点が最も大きな疑問点であった。そこで本論文では障害者に対して書かれた感想文の中から、障害者に対する感情のみを引き出して、交流教育が健常者の障害者意識までを変えうるかどうか調べた。

2. 障害者に対する感情の分析

障害者との交流が、障害者に対する感情をポジティブなものに変化させる作用を持っているか、それともネガティブな感情を増幅させる作用を持っているか調べるために被験者の障害者に対する感情を、ネガティブなものとはポジティブなものに分けて分析した。文章の内容分析の際に用いた方法と同じ方法を用いて分析した。すなわち、1人の人の文章の中にネガティブあるいはポジティブな感情を表現する言葉が1回でも出てきたら1点を加算し合計を人数で割っていく方法である。その結果を表5に示す。

表5から以下のことが言える。全体で見るとネガティブな感情表現は58.8%、ポジティブな感情表現は91.2%で、男女間で比較すると両表現ともやや男性に多く見られる傾向がある。交流群と非交流群を比較すると、交流群96.7%、非交流群88.9%で、両方の表現とも交流群にやや多く見ら

れる傾向がある。男女間で比較するとポジティブな感情表現はいずれの群も男性にやや多い傾向があるが、ネガティブな感情表現は交流群、非交流群共に性差は見られない。

ネガティブな感情表現とは障害者に対し感情的に非有効的言葉で表現されるものである。被験者の障害者に対するネガティブな感情表現を見てみると、以下に述べる 17 種類に集約される。

- (1) 障害者はかわいそう
- (2) 障害者はあわれだ
- (3) 障害を持っているのは気の毒だ
- (4) 直らない障害は悲惨である
- (5) 障害者は努力しないと生きていけない
- (6) 努力している障害者を今までにあまり見たことがない
- (7) 障害者は不幸な人だ
- (8) 障害者は苦勞が多い
- (9) 障害者はつらくて苦しいに違いない
- (10) 障害者のビデオを見て笑ってしまった
- (11) 障害者のビデオを見て気持ち悪く思った
- (12) 身体障害者と頭で考えてもピンとこない
- (13) 障害者の気持ちは理解できない
- (14) 障害者に話し掛けづらいし、一緒に行動しづらい
- (15) 自分は障害者でなくて幸せだ
- (16) 障害者の家族はつらい思いをする
- (17) 障害者はこれ以上増えて欲しくない

この 17 種類の感情を見てみると、中学生は障害者を不幸で、かわいそうな存在、障害者になったら苦勞しなければならぬ。障害者の姿はおかしく、気持ちの悪いものである。障害者というものは理解できない、一緒に行動しづらい者で、自分は障害者でなくて本当に幸せだと思っている事が分かる。さらに障害者はもうこれ以上増えて欲しくないと、障害者の存在そのものを否定しようとする者までいる。

実際に被験者が書いた、障害者に対するネガティブな感情表現は以下に示す通りである。「このテレビを見て最初笑ってしまった。これだけの人達がこんな障害にあって直らないのはちょっと悲惨だと思った。こんな人達は自分ではなりたいたいと思っていないのに障害にかかるなんてかと思った。僕ならあんなったら死にたいと思う。障害者の人でも絵を描いていなかったりその他自分の得意とすることが何もない人達は、どう生きているのかが一つの疑問でした。話すことが巧く出来ないのは聞いているのも嫌だけと話そうとしているほうが苦勞している。喋ることも出来ないし自分と比べるとかなり不自由で自分がもしそうなったら、何をしているだろうと思った。私がああいうふうになったらなどいつも思います。私は障害がなくてとっても幸せだな、なんて思った。障害ってことがどんなに重いことなのか思い知らされた。私達の不幸とかをいっぺんに神様がくれちゃったような人達なんだと私は障害者についてそう思う。

ポジティブな感情とは障害者に対し好意的な文章表現で示されるものである。被験者の障害者に対するポジティブな感情は以下に述べる 10 種類に集約される。

- (1) 障害者は努力している
- (2) よく頑張る
- (3) 努力と忍耐があることを知った

- (4) 手足が動かなくても心がきれい
- (5) 夢をもって苦労しながらも生きている
- (6) 努力すれば何でもできることを知った
- (7) 努力してできるようになっている人を見て笑うのはおかしい
- (8) 障害者を馬鹿にはいけない
- (9) ビデオを見て障害者に対する気持ちが変化した
- (10) 障害者の気持ちを考えていきたい

被験者は障害者の努力、忍耐に感心し、自分と比べて夢をもって一生懸命生きている姿に感動し、障害者を差別してはいけないんだ、差別しないようにしようと考え始めていることが伺われる。

実際に被験者が書いた、障害者に対するポジティブな感情表現は以下に示す通りである。

「僕よりも絵が巧い。足だけで御飯を作ったり絵を描いたりして、とてもすごいと僕は思います。部活で外を走ると、養護学校にいる1人の少女がリハビリみたいので2kmを1人で歩いている姿をみた。僕はなんだか感動した。僕達と障害者は全然変わりないと思った。カンガルーの絵がとっても上手でこれなら一般の人達と美術の授業はできると感心した。私達が出来ないようなことを、それぞれの障害をのりこえて自分達でできることは全部していることにも感心しました。身体障害者でもやればできるんだなと思った。このビデオを見て身体障害者の一人一人が絵を通じて力強く生きていると思った。」

以上の結果から、障害者に対するネガティブな感情を抱く人の数は、交流を行なっても全く少なくならない。かえって多くなる傾向さえ見られる。ネガティブな感情もポジティブな感情も抱く人の割合は男子も女子も変わらないということが言える。ネガティブな感情の分析から、健常者の障害者に対するネガティブな感情は、交流といった小手先の方法で拭い去れるほど単純なものではないことが分かる。ポジティブな感情の分析から、ビデオ教材は巧く用いれば、障害者に対するネガティブな感情を、いくらかでもポジティブな方向に変えうるかもしれない可能性が示唆される。

IV. おわりに

本研究は、これまでのアンケート方式と異なった、ビデオ視聴の感想文を書かせることで、交流群と非交流群の障害者意識の違いを明らかにする目的で行なった。意識の違いが分かれば新たな交流教育の在り方が探れるのでは、と思ったからである。結果は交流教育は障害者知識、障害者に対する建前としての付き合い方には効果をもたらすか、障害者意識の改善には全くといっていいほど効果がないことなのか明らかになった。小出(1981)、清水(1985)の研究でも明らかなように障害者との接触が多いから、ネガティブな感情が少なくなるとはいえないことが、身体障害者を対象にした場合もいえるということが証明されたことになる。次の文章にも見られるように、交流教育は青年期に入ってから問題である。余程巧い方法を取らない限り、却って差別意識を助長することになる。

「うちの学校の近くにもそういう人たちのいる学校がある。ぼくたちが小学生の頃、うちの学校の学芸会を毎年観にきていた、ただ観るだけでなく一緒にうたを歌った。僕は1-2年の時は、何にも思わないで喋れる生徒とは喋ったりして交流を結んだ。5-6年になるとだんだん馬鹿にするみたいに笑ったりした。6年生の学芸会の時一緒に舞台上がって歌を歌った。その人達の舞台への上げ下ろしも手伝った。だけど僕は手伝わなかった。中学生になって窓を見下ろすと病院の患者も歩いている。中学1年の頃教室の窓からその人たちに呼んだりして振り向いたら隠れるというこ

とを一時期していた。しかしだんだんやめたくなくなったのでやめた。部活で外を走ると、養護学校にいる1人の少女がリハビリみたいなので2kmを1人で歩いている姿をみた。僕はなんだか感動した。またこのテレビを視て最初笑ってしまった。しかし時間がたつにつれてテレビにくぎづけになった。」

V. 参考文献

- 1) 安藤隆男, 平山 諭, 1987: 統合教育に対する教師の意義, 特殊教育学研究, 24, (4), 10-17
- 2) 入枝 脩, 1980: 障害者に対する地域住民のイメージについて, 北海道教育大学紀要, 第1部C, 第30巻, 第2号, 341-349
- 3) 上谷宣正, 1992: 中学生の障害者との接触度実態調査-交流群と非交流群の比較を通して-, 人文論究, 第53号, 7-107
- 4) 小出 進, 1981: 精神薄弱者に対する社会意識, 教育心理学年報, 21, 133-144
- 5) 清水貞夫, 1985: 精神薄弱者に対する意識や態度の研究, 特殊教育学研究, 22, (4), 58-61
- 6) 中村 勝, 1970: 精神薄弱者についての社会的観念に関する因子分析的研究, 青森短大紀要, 7, 13-24
- 7) 中村 勝, 1976: 精神薄弱者に対する態度の因子分析, 愛媛大学障害児研究室紀要, 1, 113-136
- 8) 日本精神薄弱者福祉連盟編, 1991: 精神薄弱者問題白書1991・92年版, 日本文化科学社
- 9) 山口洋史, 1969: 中学生の「精神薄弱児に対する態度」の一考察, 部強だ医学社会学論叢, 3, 55-56
- 10) 銭本三千年, 1977: 視覚障害別冊特集号, アメリカの挑戦-差別なき社会をみざして-, 日本盲人福祉研究会

<付記>

本研究を行なうにあたり、函館市本通中学校および函館市立旭岡中学校の先生方には大変お世話になりました。ここに厚く感謝の意を表します。